

---

# 愛しいカレ

オムラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しいカレ

### 【Nコード】

N2430U

### 【作者名】

オムラ

### 【あらすじ】

私には大切に、愛しい存在のカレがいます。

——普通？の女子大生純子のちよっと？変わった恋物語。

## 純子の場合（前書き）

突発的小説。

## 純子の場合

私には大切に、愛しい存在のカレがいます。

只野 ただの 純子 すみこ。

とある大学の経済学部に在籍する女子大生。

運よく浪人することなく合格することができ、そして今年の春も留年することなく目出度くも2回生になり、只今19歳であります。

ちなみに好きな講義はゲーム理論です。

容姿は極々普遍的と言いますか、何とも特筆すべき点がありません。特徴です。

道を歩いていると道を聞かれたり、旅行先では写真を頼まれたりすることから、他人から見ると害のない人間だと思わせるのかもしれませんが。

どうしても挙げるとしたならば、髪でしょうか。

色は地毛で茶色の強い黒。

あまり手入れに気を使っているわけではないのですが、綺麗にまとまってくれます。

ただ、髪モデルになれるかと聞かれるとそこまでではない。そん

な感じです。

ここまででおわかりだと思いますが、私は至極普通の女子大生であります。

そして、他の普通の女子大生の一部の方々と同じように、私にも愛してやまないカレがいるのです。

カレと出会ったのは丁度1年前でした。

今でこそ二人でいるときは片時も離れないほど愛し合っている私たちですが、最初は全くそんなことはありませんでした。

カレとの出会いは私の一歩的な片思いから始まりました。

最初は遠くから見詰めることが出来なかったのですが、次第に我慢出来なくなり、カレに直接アタックし始めました。

色々話しかけたり、カレの好きなモノをリサーチしてプレゼントしたり、カレ好みの人間になれるように精一杯努力しました。

しかし、カレは中々振り向いてはくれませんでした。

ある時、積もりに積もった思いが弾けて、思わずカレに抱きついてしまいました。

そうしたらカレに酷く怒られてしまいました。

怒られることはわかっていました。

それでも僅かな希望を託してみたかったです。

しかし残念なことにその希望は呆気なくも散ってしまいました。

暫くカレには近づきませんでした。

カレが嫌がるだろうと思っただし、何より私の心に思っただけ以上のダメージを食らっていたからです。

一週間ほどでしょうか（正直この時は世界が全てモノクロにしか思えないほどに、憔悴しておりましたので、細かい日数など覚えてい

ません）。

私が体育座りで膝に額を付けて、瞑想していた時でした。ふと、足に何かが触れたのです。

それに気付いた私は、ゆっくりと顔を上げました。するとそこにはカレが居たのです！

驚いたことに、カレから私の元へ来てくれたのです！

カレは黙ったまま私の横に座りました。

そのまま目を瞑ってしまったのですが、ずっとずっと私の傍に居てくれたのです。

私は嬉しくて、そしてその前の反省も踏まえまして、カレの手をそっと握りました。

カレは目を開けてチラッとカレの手を握る私の手を見ましたが、拒絶することなく、そのまま居てくれました。

それからの私たちはゆっくりと歩み寄りました。

手を繋ぎ、寄り添い、そして抱きしめる。

段階を踏むにつれ、心の距離も縮まっていくのがわかりました。

学校が終わってから、私たちは落ち合い、散歩と称したデートを日課としました。

デートコースはいつもカレが決めます。

私はカレの一步後ろをついて行くのが、お決まりです。

カレとの散歩道は、何気ない道でもあつという間に鮮やかに見えてしまいます。

一人でその道を通ると、寂しくて仕方がなくなって、カレと会いたくて、つい駆け足になってしまいます。

私はカレに溺れていきました。

一人のオトコに溺れて、カレしか見えなくなっている私を馬鹿だと笑う人もいるかもしれませんが。

けれど、それでも、私は幸せだから気になりません。

朝起きた時も傍にカレの温もりを感じることができて、夜寝る時もカレの温もりに触れながら眠ることができる。

愛しい人と、共にいられる。

愛しい人が、共にいることを望んでくれる。

私はなんて幸せなのでしょう！

そして今日も、私は愛しい人の温もりを感じながら目を覚ます。

「おはよう、ケン」  
「ワン！」

## 純子の場合（後書き）

3部作を予定しています。



**全の場合（前書き）**

弟視点です

## 全の場合

僕には、頭がおかしい姉がいる。

只野 ただの 全 ぜん。

とある高校の普通科に在籍する男子高校生。

ついこないだ受験生になったばかりではあるが、目指す大学は今のところ合格圏内で、これからコツコツ勉強に励む予定。

ちなみに好きな教科は化学。

身長は178センチあり、平均より高め。

部活ではサッカーをしており、キャプテンを務めている。

高身長でスポーツ万能、勉強もそれなりに出来るとあって、それなりにモテているが、それは高校までだと思っている。

髪はやや茶色の強い黒。実は結構気に入っている。

何か特殊な能力があるわけでもない僕の唯一の特異点。

それは血の繋がった姉である。

姉は世間一般から見て、どこにでもいる普通の女子大生だろう。

しかし、実態は違う。

姉は、あるモノを愛している。

それが人間の男であるならば何の問題もない。

だが残念なことに姉が愛しているのは人間ではなく、ペットである犬なのだ。

我が家のペットは1年前に、我が家族の一員となった。

その切欠となったのが言わずもがな姉である。

それまでペットを飼いたいなど一言も言ったことのない姉が、突然犬を飼いたいと申し出たのだ。

「世話は全部私がする、費用も全部私が払う。」

そう言った姉の目は今まで見たことのないぐらい真剣で、圧倒された両親と僕はすぐに了承した。

姉は翌日、早速連れてきた。

品種はコリー。イギリス産で元は牧羊犬だが家庭犬でもある。ほっそりとした体型に艶やかな長毛が特徴だ。

両親もあまりの展開の速さに最初は戸惑っていたが、新しい家族の登場に喜びを隠せないようだった。

名前は姉が既に「ケン」と命名しており、誰も異議を唱えることなく決まった。

姉の思いとは裏腹に、ケンは姉に中々懐かなかった。

否、姉どころか家族全員に懐かなかった。

ケンはとても頭の良い犬だった。

ご飯を食べるときは溢さず食べるし、無暗に吠えることもないし、粗相もしない。

ペットとして申し分ない犬であった。

しかし、懐かない。

多くの犬が喜ぶだろうボールなどの遊び道具を与えても、見向きもしない。

次第にケンと僕たち家族の間の溝は深まっていった。しかし姉はめげなかった。

時間さえあればケンの元へ行き話しかけたり、おやつを与えたりした。

姉は大半の時間とお金をケンに費やしていた。

大学生になったばかりの女とは思えない行動だった。

だが、ケンは懐かなかった。

ある時期、姉がケンに一切近づかなくなった時があった。

姉の担当であった餌やりと散歩を僕に頼んで、姉はケンとの関わりを断った。

初めて僕が餌をやったとき、ケンは訝しげに僕の顔を見たが、それだけであまり気にはしていなかった。

と、いうか気にかけていたら可笑しい。

一週間が経った。

姉はケンと関わりなくなってから、家にいる間のほとんどずっと仏壇の置いてある和室の隅にて体育座りで固まっていた。

流石に一週間以上放置していたらヤバイのでは、と思った僕が和室を覗くとそこには今まででは考えられない光景があった。

なんと、相変わらず体育座りでいる姉の隣に、ケンが寄り添うように座っていたのだ。

しかも姉はケンの手を握っていて、ケンもされるがまま。

頭を撫でようとするだけで避けていたあのケンが。

正に衝撃的な光景であった。

その後、ケンは驚くほど姉に懐いた。

触れるどころか抱きしめられても拒絶をしない。

両親や俺に触れられても、拒絶することがなくなった。

ケンが我が家に来て3カ月目にして漸く、ケンは我が家の一員になった。

しかし、そこから姉の異常さが露見し始める。

否、既に異常だとは思っていたが、それが確信に変わったのである。大学とアルバイトに行っている時以外は、常にケンに構っている。

アルバイトで稼いだお金も全てケンに注ぎ込んだ。

ケンを抱きしめて「大好き」や「愛してる」と言い、寝るときは自分の布団の中に入れて、四六時中ケンを離さなかった。

一度学校帰りにケンと散歩している姉を見かけたことがあったが、その時の姉は嬉しさを隠しきれずにずっとニヤニヤしていて怪しいことこの上なかった。

姉も姉なのだが、ケンもケンだ。

最初が嘘のように、姉を受け入れている。

姉が長時間抱きついていても、されるがままというのも普通になっている。

そして今日も姉は夕食後の家族の団らんの時間で、ケンを抱きしめて離さない。

なすがままのケンの顔が恍惚としているように見えたのは、きっと目の錯覚だろう。



**全の場合（後書き）**

次で終わります

**ケンの場合（前書き）**

全3部作、これにて完結。



## ケンの場合

私にはとても大切な、カノジョがいる。

只野 ただの ケン。

父親と母親、娘と息子の4人家族の只野家で飼われているペットの犬。

犬種はコリーで、生まれて1年と半年が経った。

とても凛々しい顔つきで、さらにその毛並みは艶めいていて美しい。散歩に出かければ雄雌問わず、追いかけまわされることが多々ある。嫌いなモノはペットフードで、好きなモノは主人である只野家長女の純子。

と、言うのは仮の姿である。

アルバート・ウィルダー・プランズネット。

グレイウィルダー王国を治めるプランズネット家の現国王の長男、つまり第1皇子で、今年27歳となる。

顔立ちは整っており、シャープな輪郭と、鋭い眼差しは凛々しい。

髪は銀色で、肩にかかる程度の長さ。

身長は180センチと、国の青年の平均身長よりもやや高いぐらいだ。

軍隊の訓練には週に2、3回は参加しているため、身体はそれなりに鍛えられている。

これが私の本来の姿なのだが、今現在厄介なことに巻き込まれ、このような事態になっている。

厄介なこと、というのは王族にありがちな継承権争いである。

とは言っても、元々国全体としても国王である父も私を次の国王として認めていた。

しかし、幼い頃から折り合いの悪かった、血が繋がっているのも恥ずかしい思慮の浅い弟が空気を読まずに、反対してきたのだ。

弟一人ならば大した問題にはならなかったのだが、良からぬことを考えながらも頭の回らない馬鹿げた一部の奴らも仲間となっていたのが、厄介であった。

どうせだから弟を含めた奴らを一掃してしまおうかと、国王含め王宮の上役らと画策していたのだが。

弟は予想の斜め上をいった。

黒魔術に定評があり腕は良いが、見返りに命を望むと噂のある魔術使いと手を組んだのだ。

噂は知っていたが、金を出せば問題ないと根拠のない自信があったらしい。

そして、弟は姿を消した。阿呆である。

弟が消えた後、それに群がっていた奴らも無様な姿を晒す者もいれば、足早に国を去った者もいたらしい。

まあ弟とその他の末路はこれまでとしておいて、私の話に移ろう。

あくどい魔術使いに、私はある術をかけられた。

それは犬に変身させられ、異世界に飛ばされるという術だった。（何故犬なのかはおそらく弟が犬を嫌いだっただからだろう）

しかし私はすぐに国に仕える魔術使いによって見つかった。（ちな

みにこの魔術使いも弟に依頼を受けたらしい。さらに言う私の旧友でもある）

犬の姿である私の前に現れた魔術師は言った。

「思った以上に複雑な術が施されているから結構時間かかるんだよねー。そのままの姿だとあっちに帰れないみたいだしー。だから、とりあえずその姿で頑張ってみてー。死ぬなよー。じゃーねー」

か弱い子犬と化してしまった私は、為すすべもなく奴の姿を見送ることとなった。

こちらの世界に來た私は、何故かペットショップにおり、そして純子に飼われることとなる。

始めは、油断していた自分に、そして昔から人を馬鹿にしたような口調の変わらない魔術使いの奴への苛立ち。加えて犬であることの抵抗感で、純子含む只野家の人々には冷たくあたっていた。

しかし彼ら、特に純子は私を家族の一員として大切にしてくれた。私のために、尽くしてくれた。

それでもまだ素直に受け入れられなかった時、一度純子を拒絶した。それにショックを受けたらしい純子は暫く私に近づかなかった。

そこで私は気付いたのだ。

純子との関わりのない日々が、酷く味気ないものであることに。

純子の私に向ける愛が、私に安らぎを与えていたことに。

そして、真っ直ぐに私を見つめる純子に惹かれていることに。

自分の気持ちに素直になった頃から、純子への想いは大きくなって

いった。

始めの内は気恥しく、スキンシップの激しい純子に戸惑いを隠せなかったが、自ずと求めるようになった。

出かけるときに、私の一步後ろをついてくるその奥ゆかしさを愛らしいと思った。

常に、傍に在りたいと思うようになった。

只野家のペットのケンとしてではなく、アルバート・ウィルダー・ブランドネットの伴侶として、純子に傍に居て欲しいと。

純子の私に向ける想いはケンへの、ペットへの純粋な愛情だろう。いきなり本来の姿を見せ、異性として見てくれなどと言ったとき、彼女は戸惑うだろう。

けれど、私は彼女が欲しい。

本来の姿に戻った時、純子のペットへの愛情を異性への愛情へと変えるべく、私の溢れる愛を純子に囁き、私のモノになってもらう。

そう決意してから時は流れ、私の想いは強くなっていった。そして今日。漸くそれを実行するときがやってきた。

「ケン、ただいま！」

私以外の住人が出払っている家に、純子が帰ってきた。傍らに立つ旧友でもある魔術使いに、目線をやる。

『私が合図したら、元に戻してくれ』

「ぎょーい」

『……』

玄関から真っ直ぐと私がいつもいるリビングへと小走りで駆けつける。

その足音さえも愛おしく思えるなんて、末期かもしれない。

「ケン！ た……え、誰？マジシャン？」

さあ、覚悟しろよ。愛しい純子。

## ケンの場合（後書き）

ありがとうございました。

※ぎょーい〓御意

※マジシャン〓旧友魔術使い

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2430u/>

---

愛しいカレ

2011年6月27日13時47分発行